

シリーズ第34回

笛吹市探訪

武田氏と笛吹市⑪

― 八田家書院(石和町) ―

戦国時代、甲斐国各地に住んでいた武田家臣の中で、石和町八田に屋敷を構えていたのが八田家です。八田家は武田家の直屬家臣団で蔵前衆(くらまえしゅう)と呼ばれていました。その仕事は、年貢(税)を集め、蔵などに収める作業でした。それを元に、軍事物資や日用品などを購入していました。

活動をしていました。武田家滅亡後、八田家は徳川家康から領地の所有を認められ、御朱印(ごしゅいん)状をもらいました。御朱印状とは、朱肉の印を押して使った公文書のことです。八田家の拠点である石和は、関東方面につながる甲州街道・青梅街道・雁坂道(秩父道)、駿河方面につながる鎌倉街道(御坂路)の合流地点にあります。また、笛吹川は駿河との水運で栄

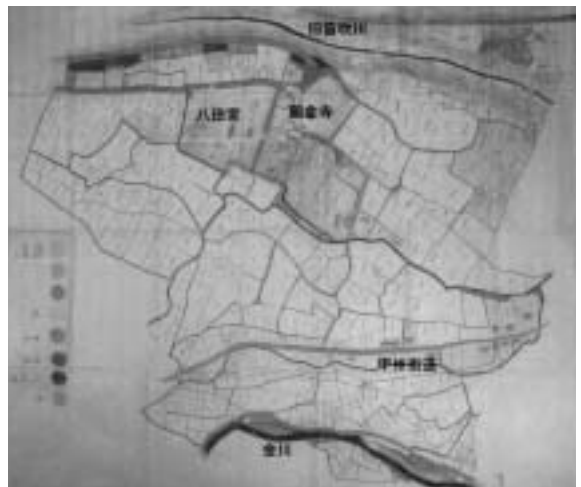


八田家書院(山梨県指定文化財)



楊貴妃(文久3年(1863)作成。八田家伝来の雛飾り)

えた富士川の上流にあります。身延線が開通するまで笛吹川・富士川は、甲州から駿河への重要な交通路でした。この笛吹川は、明治40年(1907)の大水害までは現在の近津(ちかつ)用水(旧笛吹川)を流れていました。江戸時代に描かれた「八田村古絵図」(山梨県指定文化財・1855年作成)を見ると、八田家のすぐ北側を笛吹川が流れています。戦国・江戸時代の八田家屋敷の北側には、蔵が立ち並び笛吹川の船着場があり、さらに南側には、石和宿のある甲州街道が通っていたことから、石和町八田周辺は、八田家の商業活動に便利な場所だったと言えます。八田家の屋敷周辺は、現在、八田御朱印公園として整備されています。屋敷は東西120m、南北の一番長い部分で150mあり、北側の一部には土塁(どるい)・堀が残っています。戦国時代の土豪(どごう)の屋敷の様子がよく残されているため、山梨県の史跡に指定されています。また、現存する八田家書院は、慶長(けicho)けいちょう)6年(1601)に造られました。桁行(けたゆき)一棟の家の長さ)12・74m、梁間(はりま)6・39mで屋根は茅葺(かやぶき)、東側の屋根は入母屋(いりもや)造り、西側の屋根は寄棟(よ



八田村古絵図(山梨県指定文化財 1855年作成)

せむね)造りになっています。間取りは、南から見て左から奥の間・中の間・三の間と並んでおり、また、南側には大玄関が東方向に開く形で配置されています。書院は、客を招きお茶を飲んだりするための建物で、17世紀の書院造りの建物が山梨県内では残っている例が少ないため、八田家書院は山梨県文化財に指定されています。八田家書院では、2月9日(土)から4月13日(日)まで「八田家書院でひな祭り」と題した展示会が開催され、武田家の蔵前衆・商人として活躍した八田家伝来のひな飾りなどが展示されます。八田家書院を訪ね、当時の八田家の暮らしに思いをはせてみてはいかがでしょうか。